

# 新書紹介

## 都市政策の視点

川上秀光編著

学陽書房 四六判 三五七頁

一、七〇〇円

今日、わが国では、高度成長から安定成長へという転換期にあり、旧来からの中央集権体制が大きく流れを変えようとしており、国がモデル、目標を与えらるという時代が終って、地方がそれぞれ明日の都市に向けての目標を持ち、試行錯誤を重ねながら新しい都市作りを行っているような地方の時代という潮流にある。

ところで本書は、「地方の時代」の地方自治シリーズ全五巻のうち第Ⅲ巻で第一線の学者、研究者、行政実務家等九人の執筆者により、豊富な事例研究と経験等を駆使した論文で構成されている。巻編成を大別する

がらするどい観察力と洞察力で問題点や今後の課題について述べている。

「都市の現状と動向をどうとらえるか」を私は興味深く読んだ。なぜなら、その稿の視点が私の考えに近いものだったからである。たしかに、従来行政による都市の現状と動向についての把握の方法は、各種の基礎調査や予測手法として蓄積されてきたが、市民としては都市の現状を認識するための情報に乏しく、生活に根ざした不満や要求が都市政策の基礎として汲みとられる機会が少なかった。従って、今後、求められるのは、両者の認識をつなぐ方法であり、そのための方策として第一にあげられるのが、問題点等の地図への表現(落とし込み)である。

まず「都市の状況と都市政策の発想」では、高度成長期における都市化の波が引き起こした多くの都市問題について事例を混じえて概略を述べ、今後われわれが当面する都市政策、例えば住宅政策、エネルギーに対する都市政策等についての視点、さらには都市政策の骨格をなす都市の基本計画と地区計画について、各都市の事例を引用しな

「都市の住みよさと魅力」では、「地場産業」と「地域産業」について、筆者独自の定義付けを基礎に、この両者を包括して「地縁産業」なる概念を提起し、地方都市の事例に基づいて地域社会あるいは住民の生活という視点から従来の産業観を問い直している。

「空間・財政・エネルギー資源の制約の中」では、第一節として都市の土地利用について適切性を欠いた土地利用が地域環境のバランスを破壊している事例を紹介しつつ現行の土地利用に関する制度上の問題点などをすどく指摘している。第二節では、都市の交通政策についての基本的な考え方を経済政策の一部として位置付け、交通政策と土地利用との関係を重視した総合的な視点での取り組みが重要であると指摘している。この考え方は時代の流れに則した考え方で同感である。それに加え、総合的視点の中で自動車交通に目を向けるならば、土地利用計画と道路のネットワークとの関係はより不可欠なものとして位置づけることが重要であると

思う。第三節では、都市における主な供給処理施設(上下水道、電気・ガス・電話等)の現状さらには共同溝を始めとする新都市施設等と都市計画、都市政策との関連について述べられている。第四節では都市政策の一つの柱ともいえるべき下水道整備を始めとする環境衛生保全施策について、財政面での問題を除けば順調に推移しているとしている。一方、特に大都市圏を中心とする都市域において廃棄物処理に係る状況は深刻化しており、今後は廃棄物処理体系整備の都市環境施策上の位置も重要な課題になると指摘している。

最後に本書を通して、各章とも都市政策の課題なり問題点についてかなり明確に打ち出していると思われる。地方の時代へと流れが変化している今、本書が述べている視点をどう受け止め、どう料理して行くかが、われわれ読者に課せられた課題なのである。

〈経済局経済調査課

内田紘司〉